

# 『コンコード川とメリマック川の一週間』再考 — 環境史家としてのソロー —

上岡克己

## 序 ドナルド・オースターの反省

『ネイチャーズ・エコノミー』(*Nature's Economy* 1977, 1985) で知られる環境史研究者の大家オースターは、著書 *The Wealth of Nature* (1993) の中でジョセフ・ウッド・クルーチの *The Twelve Seasons* (1949) を読んで、自らの歴史の授業に全く自然が欠如していることを痛感する——土地が過去の人間体験に与えた影響もなければ、土地の香りもコケの香りも、春沼地で鳴くカエルの声もしない。そういう自然を欠いた授業おこなってきたことを痛切に反省して、歪められた歴史を正すことを誓う (vii)。

タイトルからもわかるように、オースターのこの著はアダム・スミスの『国富論』(*The Wealth of Nations* 1776) を当然意識して書かれたものである。スミスは自然の経済を全く無視して人間の経済、それも人間の価値を物質の豊かさにおくものの見方を推奨し、経済学研究ばかりか人間の生き方に計り知れない影響を与えた。一方スミスの生きた18世紀はギルバート・ホワイト、リンネ、ビュフォンなどが活躍したナチュラルヒストリーの時代と重なるが、スミスの唱えた「物の価値は人間に直接役立つかどうかで決まる」(215) 経済下では、「自然の経済」に目を向ける人は皆無であったといえる。本稿は彼等から半世紀を経た19世紀の半ば、ようやく現れてきたエコロジーの先駆者ソローに注目し、オースターの反省をふまえて、特に彼の第一作『コンコード川とメリマック川の一週間』(*A Week on the Concord and Merrimack Rivers* 1849 以下 *A Week* あるいは『一週間』と略する) におけるソローの環境史家としての視点を解明しようとするものである。

## 1. 鎮魂の物語

亡くなる前日の1862年5月5日、ソローは友人のエドモンド・ホズマーを病床に呼び、署名入りの *A Week* を献呈した。この著の5つのエピグラフの一番最初に置かれた「お兄さんが舟で行きたいと思うところならどこでも僕はいつも付いて行くよ」(2)の下に、20年前に亡くなった兄ジョンの遺髪が留められていた。そして翌日の5月6日、妹のソフィアに *A Week* の一節「私たちはナシユア川の河口、そしてまもなくサーモン川

河口を風よりも速く滑るように通り過ぎて行った」(351)を読んでもらうと、ソローの口からは「さあ漕ぎ出そう」(481)という言葉がもれたという。この後昏睡状態に陥り、「Moose」と「Indian」という有名な言葉を残してこの世を去っていった。

このようなエピソードからもソローにとってひときわ思い出に残る作品と言え、*A Week*ではなかろうかと思われる。それは単に彼の第一作というだけでなく、不幸にして若く逝った愛する兄への鎮魂のエレジーを、二人で出かけた川の旅を牧歌的雰囲気の中で思い起こし、本という媒体を通して兄との再会を希求しようとしたと考えられる。

## *A Week*の背景

*A Week*を論ずるにあたってこの作品の背景にある伝記的な事実、特に一人の女性をめぐる兄弟の微妙な精神状態を確認しておく必要がある。1839年7月20日、ソロー兄弟が開設したコンコード・アカデミーという私塾の生徒の姉にあたるエレン・シュアルがコンコードを訪れた時、ソローはこの17歳になる美しい乙女に一目ぼれし、すっかり彼女のとりこになってしまった。7月25日付けの日記には、「もっと愛する以外に愛を癒す方法はない」(*PJ* 1:81)とまで書き記している。翌年の6月には、「先日私は屈託の無いとても美しい女性をボートに乗せた。私がオールを漕いでいる時、彼女は船尾に座り、私と空との間には彼女が座っているだけだった」(*PJ* 1:132)とある。後のストイックなソローを知る者にとっては驚きの一文であるが、多くの若者と同様にソローにも青春時代の淡いロマンスがあったのである。

ところがエレンに魅了されたのは弟だけではなく、2歳年上の兄のジョンの方もエレンに夢中になり、いやむしろ弟より積極的に彼女にアプローチし始めた。ジョンは*A Week*の原型となった二週間の川と山の旅(1839年8月31日～9月13日)を終えるやいなや彼女の実家を訪問し、翌年の7月にはプロポーズさえしたのだった。エレンはこのプロポーズを一旦受け入れたが、両親の説得により断ることになった。後のエレンの証言によれば、彼女が本当に好きだったのは弟のヘンリーの方だったということである(Harding 100)。いずれにせよ兄が断られたことを知ると、それまで兄に遠慮していたソローは直ちに行動を開始し、エレンにプロポーズしている。しかしこのときエレンは牧師をしていた父親に相談してから断りの手紙をソローに書き送った。

エレンをめぐる兄弟間のデリケートな問題は、以前のような良好な兄弟関係を続けることを不可能にした。口には出せないが、二人の間に修復されることのない深い溝、わだかまりを生じさせたと考えられる。さらに不幸がソローを襲った。1842年1月ジョンがカミソリの傷が化膿して破傷風に罹り、ソローの献身的な看病にもかかわらず27歳でその短い生涯を閉じたのである。この出来事はソローに癒しがたい傷を生じさせた。ソローは兄の突然の死に耐えがたいショックを受け、彼自身が破傷風の兆候を示すという精神的な病に襲われたのであった。一人の女性を兄弟で争ったこと、その兄が突然亡くなったことが知らず知らずにソローの心の中で罪悪感に似た精神状態を醸し出していた

と考えられる。彼のあまりにも善良な性格が災いして精神的な病と化したのである。

## A Weekの執筆過程

ソローは生前兄に対して自らの気持ちを十分伝えることができなかつたことを後悔し、仲がよかった頃一緒に旅した体験を甦らすことで、兄との和解を試みようとした。このような背景からA Weekは書かれるに至つたのである。したがってA Weekの基本的テーマは、まず第一に兄の鎮魂の物語、リンク・C・ジョンソンによれば「兄の死に対する悲しみを和らげる牧歌的なエレジー」(Illustrated xix)を目指すものでなくてはならなかつた。

確かに牧歌的な雰囲気は漂うコンコード川とメリマック川の船旅は、黄金時代への瞑想を重ね合わせることで、兄の魂は和らぎ、自らの罪悪感も解消されるはずであった。しかしながら企画された本は、まず最初に1837-44年にわたる日記から材料を集めてLong Bookにまとめられ、1845年7月4日から住み始めたウォールデンの森の小屋でFirst Draft(初稿)が書かれ、1847年には第二稿を完成させ、さらに追加、推敲を経て1849年の出版へとつながってゆくことになる(Johnson xi)。この過程で鎮魂のテーマとともに他のいくつかのテーマが混在してしまい、兄の存在感が極めて希薄となつたことはいなめない。そのため統一感の無い作品は、しばしばフォームレスとさえ形容される評価が主流となつていった。

リチャード・J・シュナイダーも述べているように、A Weekは「エマソンの影響を少なからず受けた若い作家が、超越主義の熱意を表現すると同時に、自らのユニークなヴィジョンを表現しようと試みた作品」(58)であり、ソローの著作のなかでも最も超越主義的な作品であることに異論はないであろう。ソローはこの作品の中で常に超越主義的な生き方を探究し、自己の完成にはどうすればよいかをたえず思索し続けている。しかしながら先にも述べたように、あまりにも多くのものを詰め込みすぎたので、この作品にはたして作者が狙つた統一感があるのかないのかをふくめて、様々な解釈が多岐にわたっていることも事実である。

構造的には二週間の川と山の旅が一週間に圧縮され、表面上は一週間という枠組みの中で出発から帰宅までの循環構造が見られる。一方内容に至ってはウォルター・ハーディングによれば、「神聖なものの探求」、「超越主義的体験の展覧会」、「インディアンの弁護」、「ギリシャの神々に感謝する歌」などの評価があることを指摘する(シュナイダー 63)。一方リンク・C・ジョンソンはA Weekの基本的なパターンを「旅とエレジー」であることは認めながらも、以下の3つの主要素から構成されていると説く。その第一はソローは当時の社会問題に対して「改革」を強く意識していたこと、第二にインディアンと白人植民者との関係を通して「植民地史」に関心をもっていたこと、第三に「文学的課題への脱線」、つまり文学作品を引用することで作家としての自己主張を正当化したかつたことを挙げている。

本稿は *A Week* を極めて超越主義的作品であることを認めた上で、この作品には後のソローの生き方を決定付けるもう一つの重要なテーマが貫かれていることを指摘したい。それは旅の過程で体験した自然観察と流域の自然史を読むことを通して、彼が自然破壊の現状に目を向けたことである。文明化の過程で風景の変化、特に川の変貌に彼は人間と自然との複雑な関係を看取した。彼は現代でいう「環境史」という視点をいち早く導入し、アメリカの文明発展に一抹の不安を覚え、その危険性を警告したアメリカ文学で最初の作家とは言えないだろうか。

## 2. 環境史への関心

### 環境史とは何か

オースターが編著 *The Ends of the Earth* (1988) のなかの “Appendix: Doing Environmental History” で認めているように、歴史の重要な主題は政治、国家、大統領、首相、法律の制定、裁判所と政治家との確執、外交交渉。つまり人間に関するもののみが扱われてきた、しかしながら環境の時代に突入した現代ではその手法にも限界が見られる。「人間がどのように自然破壊によって影響されたのか、また人間はどのように環境に影響を与えたのか、その結果はどうだったのか」(290-91)、その研究が環境史の目標であるという。実際のところ *A Week* のどの章にも川の変化(変貌)が言及されており、ソローの環境史への関心は *A Week* 執筆過程でいっそう先鋭化していったと考えられる。

実はソローの歴史認識にオースターよりも先に環境的要素を取り込んでいた研究者がいた。*Thoreau's Alternative History* の著者ジョウン・バービックである。彼女は歴史家としてのソローを次のように要約する——「ソローは時の経過を理解するものとして歴史を捉えていたが、それにはすべての自然界が参加することが条件であることを再定義している」(16)。つまり彼女の言うソローの「もう一つの歴史」感覚とは、従来のアメリカの国家形成を人間を主体とする時間の経過ではなく、自然の視点をも織り込んだアメリカ史に書き換えようとする意欲的な姿勢なのである。これはソロー像を natural historian から environmental historian に変えるのに十分な証明である。要するに歴史家としてのソローの使命は、今までの歴史家がつくりだした歴史(文明史)の虚像を矯正し、新しい歴史(人間と自然との関わりの歴史)の断面をあぶりだして読者に問いただすことにあった。

### 「コンコード川」という章の意味

*A Week* は8章から成り立つ。第1章「コンコード川」から始まり、第2章から8章までは“Saturday”から“Friday”までの一週間という構造になっている。「コンコード

川」という章がプロローグとして独立してあるなら当然エピローグがあってしかるべきであるが、ないのは統一した構造としては不自然である。それでも一週間の構造は一応首肯できる。ソローは「コンコード川」で川の一般的な意義を語る。

川はどこにおいても最初の旅人を導いたに違いない。川はぼくたちの家のすぐ前を流れるとき、それは遠い国での事業や冒険にぼくたちをたえずいざなうものだ。そして自然の衝動に駆られて、川岸に住む人びとは、ついには地球上の低地へと流れとともに下ったり、川に誘われて大陸の内部を探検したりするのだ。土地をならし、旅人の進路から障害を取り除き、旅人の渇きをいやし、その舟を水面に浮かべるだけでなく、もっとも興味深い風景、世界でもっとも人口が多い地方、動植物界が最大の完成度に至ったところなどへと導くのだから、川は全人類にとって自然の公道といえる。(木村 34-35)

この引用で注目すべき箇所は最後のところで、川が「動物・植物王国が最大の完全性をたもっている (the animal and vegetable kingdoms attain their greatest perfection)」(12) とソローが言及したことである。すぐに思い出されるのは、エマソンが『自然』の最後で言及した「自然を支配する人間の王国 (kingdom of man over nature)」(109) であろう。二人の引用を比較すると、彼等自身の自然観の相違が浮かび上がってくる。エマソンにとって自然は精神的にも物質的にも人間に必要なものであったが、あくまでも主体は人間のほうにあった。他方ソローにとって、超越主義的な自然観ではエマソンと共有するものの、人間と自然との関係において両者は平等であることを主張する。ソローのこのような自然観、現代の定義では生命中心主義的な自然観と言えようが、早くも第一作にその片鱗を見せていることは注目に値する。

## ニューイングランドの環境変化——川の変貌

ソローは「コンコード川」の章の最初で、コンコード川は二つの支流（サドベリー川とアサベット川）をもち、ローエルでメリマック川と合流する長さ50マイル、深さ4～15フィート、川幅100～300フィートの川であることを自然史的に説明した後で、「ダム（堰）が建設されて以来、何千エーカーもの土地が洪水に見舞われ」(6)、農民たちが干草を入手するのが難しくなったことを語っている。なぜ川にダム（堰）が必要かといえば、ダムを造ることで川の水位を上昇させ、当時の重要な交通手段であった船を上流域まで運航させることにあった。一方水位の上昇は、川沿いの草地を水没させ、当時の農民の生活の基盤となっていた家畜用の干草の減少につながっていたので、農民にとっては死活問題となるのであった。

環境史研究者のウィリアム・クロノンが『変貌する大地』(Changes in the Land 1983)の中で述べているように、ニューイングランドにあった草地は植民者の生活を根底から

支えていた。というのも彼等が連れてきた家畜の飼育こそ安定した農業の基盤となり、産業をおこし、インディアンを駆逐する原動力となっていった(190-234)からなのである。さらにクロノンが指摘しているように、家畜の放牧が「植民地時代の激しい森林破壊の発端となった」(219)こともアメリカの環境史を考える上で避けて通れない問題でもある。

## ダム問題——環境アクティヴィズム

第2章「土曜日」は穏やかなシーンで始まる。自然界と精神界の両方を象徴する下部を緑色に、上部を青色に塗ったソロー兄弟のボートは勢いよくコンコード川を下って行った。独立戦争当時に戦いが繰り返されたノース・ブリッジの周囲には今では花が咲き乱れ、釣り人の姿も見える。文中に挿入された詩には「羊飼いが二度引用され、意識的にパストラルの境地を醸し出している。「natural historianは曇りの日や幸運を祈る漁師ではなく、漁業が「瞑想する人間のレクリエーション」と称され、森や川へ出かけることが有意義であるように、ナチュラリストの観察の実は、新しい種や属ではなく新しい瞑想にある。科学もより瞑想的な人間のレクリエーションにすぎない」(25)。「今世紀において、種々の魚がまだその自然の秩序(economy)を乱されず、その数を維持しているのが観察できる時、自然の懐が雄大で揺るぎないという感が強まるし、魚たちの幸福そうな様子は、夏の風物詩でもある」(26 小澤 93)。

これらの超越主義的な描写に続いて、ソローは「ブリーム(魚)を怖がらせないでそっとなでて指をかませた」(27)体験を語り、その後は魚の分類を数ページにわたって詳細に紹介する。これらはいわゆるリンネ流の分類法の域をはず、ナチュラリストの面が色濃く反映されている。しかしソローの関心が魚の種類から魚の減少に移るにつれて、彼のエンバイロメンタリストとしての特徴が顕著になり始める。魚の減少は「魚が遡上しなくなったためであり、その原因は「ビレリカにあるダム(堰)と運河、それにローエルの工場」(34)にあると断言する。地元の人々の「魚の遡上期間だけでもダムを開放すべきである」(34)「魚道(fishways)が正しく建設されていない」(34)声にも共鳴している。ちなみにOEDによればfishwayの初例は1845年となっているので、*A Week*のこの例はきわめて初期の部類に属する。ソローの環境意識の高さを物語る例の一つである。

環境意識が普及した現代でこそダムの開放や魚道の整備が語られるが、19世紀半ばにおいてだれがソローの発言に耳を傾けたのだろうか。これらの発言に続いて「自然はいずれビレリカのダムやローエルの工場を破壊して、再びコンコード川は清く流れることになろう」(34)と語る。もしここでこの話が終わっていたら改革主義者、環境主義者としてのソロー評価は低いものになっていたであろう。実はこの後に現代のラディカルな環境保護運動に大きなインパクトを与える一文が加えられることになる。それはダムによって遡上を妨げられたシャド(魚)に共感し、「私一人でも君に味方する。あのビレリカのダムに対して役立つのはかなてこ(パール)だけであることをだれよりもわかって

いる……魚が泣いているというのに魚の泣き声をだれも聞いていない。私たちはみな同時代に生きているもの (contemporaries) であることを決して忘れてはならない」(37)。当時他の生物のために発言する人がいたであろうか。環境破壊に対して実力行使を明確に認めたこの発言は、後の生態学的破壊活動 (ecological sabotage) の原型を形づくった。20世紀後半、ネイチャー・ライターであるエドワード・アビーや、ラディカルな環境保護団体「アース・ファースト！」の創始者デイヴ・フォアマンがグレン・キャニオンダムによって堰きとめられたコロラド川解放を夢見たのは、ソローのこの発言に勇気付けられたせいかもしれない。

「ダム撤去」に関しては、コンコードを含む周辺の町にとっても切実な問題であった。ソローは地域の人々が「ダムの破壊 (levelling of the dam) を要求している」(38) ことの仔細は、コンコード川河口近くのビレリカに1708年製粉業者がダム(堰)を造ったことに由来する。これによって水位が上昇し川岸の草地在り水没することで、農家は家畜の餌に困ってしまったのであった。A Week出版後もこのダム問題はくすぶりつづけ、1859年コンコードを中心とする5つの町が州政府に訴え、ソローを雇って川の調査を依頼したが、残念ながらこの訴えは退けられてしまった (McGregor 127)。敗訴に終わってしまったとはいえ、当時ソローがいかに自然環境に精通していたかを示す例の一つでもある。測量士としての職にアンビヴァレントな感情はずっといただいていたが、ネガティブな面を差し引いてもソローの自然観察記録、それを綴った日記は近代自然保護運動の理念を明らかにするとともに、現代環境主義運動にも生かされてきている。

ソローの改革者としての生き方は、A Weekと時を同じくして出版された『市民の反抗』の精神と重なるところが大きい。またこの精神は『ウォールデン』にも継承されて、「この思い上がった厄介者(鉄道)を切り通して迎え撃ち、その脇腹に槍を突き立ててくれるわが国の英雄、ムーア・ホールのムーアはどこにいるのだろうか……森が切り倒されているというのに、どうして鳥のさえずりが聞こえようか」(下38)につながってゆく。

注目すべきは先のビレリカのダム破壊への願望が、First Draft (初稿) の中ですでに綴られていたという事実である。初稿にはさらに驚くべき環境意識の高い表現も書き込まれている。例えば「あらゆる神話の中で、ドルイド族のオークの木やエジェリアの森と同じく、森は神聖な場所となる。バーンズデールやシャーウッドの森がなければ、ロビン・フッドの意義はない。無尽蔵の森の風景の中で生きた人生こそ私たちを魅了してやまないものである」(Johnson 335)と語る。残念ながら川の旅行記であるA Weekには、この箇所の神聖な森の表現は採用されなかったが、初稿とはいえこの一節にソローの高い環境意識を垣間見ることができよう。

### 3. インディアンと白人植民者

第3章「日曜日」も超越主義的な穏やかな川旅の描写で始まる。「朝、川と隣接する地域は深い霧に包まれ、私たちのおこした火の煙は、静かで薄いかすみのごとく渦を巻きながら立ち昇った。しかし私たちが漕ぎ出す前に朝日は昇り、霧は消え、川面からわずかな蒸気が昇っているだけだった」(43)。ソローは近づいてきた小型船スキップに乗った二人の男に注目する。彼等があまりに自然に溶け込んでいる姿にすっかり魅了され、「人間の動きすらもなんと美しい気高いものとなるだろうか。私たちの生活も全ての自然の秩序の中では (in its whole economy) 最も美しい芸術作品や自然の作品と同じくらいの美しさを持つことが可能になることを思い起こさせた」(49) と語る。人間の営みと自然の営みが大きな秩序の中で調和した状態こそソローが終生探求してやまない境地であったが、前章「土曜日」でも言及されたビレリカの町の変貌を見るにつれてその期待は裏切られてゆく。A *Week* におけるソローの歴史感覚で特徴的なのは、インディアンへの言及が多いことである。ロバート・F・セアは次のような表を作成して、ソローが白人の生き方とインディアンの生き方のどちらが望ましいかを読者に問いかけていると考える (29)。

インディアンの先史時代——「コンコード川」

先史時代と白人到来——「土曜日」

白人到来、宗教的闘い——「日曜日」

戦争——「月曜日」

商業——「火曜日」

友情——「水曜日」

模倣と芸術——「木曜日」

詩と独創性——「金曜日」

本章でソローはビレリカの町の歴史を、白人開拓者の生き方とインディアンの営みを対極にすえて語っているが、白人植民者が主役の歴史より、先住民インディアンや自然環境の変貌 (川や森林の変化、動植物の減少、農地の拡大) の歴史に関心を寄せていた。

ある春のこと、白人がやって来て家を建て、この地を開墾して日光を入れ、農地を乾燥させ、古い灰色の石をフェンスにして積み重ね、家の周囲の樹木を切り倒し、ヨーロッパから持ってきた果樹園の種を植え付け、ウィルダネスに香りを放つ野生の松やジェニパーの隣に無理やりリンゴの木の花を咲かせた……白人は勝手に川に橋を架け、家畜を川の草地に連れて行くかと思えば、野生の草を刈り、ビーバー、カワウソ、マスクラットの巣を暴き立て、大鎌を振り回してはシカやクマを怯えさせた……このようにして白人は町を建設してゆく。白人のモウズイカはインディアンのトウモロコシ畑を凌駕し、香りのよい英国の牧草が新しい土地を覆い隠した。(52)



白人はインディアンのモカシンやバスケットを買うばかりか彼等の狩猟地まで購入し、拳銃の果てには彼等が埋葬されている場所すら忘れて遺骨まで掘り起こしている。(53)

他と同じく過度の文明化があると、文明は耐えがたいほどひどくなるものである。高度な教養人すらも骨が曲がってしまい、天から生まれた美德もただのマナーがよいだけに成り下がってしまう。年々トウモロコシ畑で芽を出す若い松の木が私にとっては新鮮な事実。先住民インディアンを文明化しようと話しているが、それらは彼等の改善にはつながらない。インディアンは薄暗い森林での生活から慎重に離れることで、土着の神との交流を守り、自然と稀なる特別の関係を持つことが許されている。(55)

もし私たちがほんの一瞬でもインディアンのミューズ（詩神）の歌に耳を傾けることができれば、インディアンは自らの野蛮性（savageness）を文明（civilization）と交換することはありえない点を私たちは理解すべきである。(56)

ソローがなぜこのようにインディアンの存在を評価しているかといえば、エコロジカルな視点から見てインディアンが白人植民者より自然への負荷が少ない生き方をしていること、そしてインディアンが生まれながらもつ野生さである。特に後者に関して、ソローは「文明の中にいる人間は最終的に墮落する」(56)と語り、墮落を避けるためにも文明に欠ける野生を強調するのである。後の『ウォールデン』にもあるように、「我々には野生の強壯剤が必要（下264）なのである。ただ『ウォールデン』でも『一週間』でも野生の強調は牧歌的なパストラル構造を崩壊させる危険が大きく、ソローは常にそのバランスに腐心しなくてはならなかった。

その典型的な例が「日曜日」の章に見られる。ソローはコンコード川とメリマック川を結ぶ長さ6マイルのビレリカ運河について、「森と草地は同時代にできたものではないので風景とは調和しない」(62)と語りながら、「しかし時間がたてば、自然は回復し、ふさわしい灌木や花を生み、カワセミも水面にかかる松の木に止まり、ブリームやピカレル（魚）も泳ぐことになろう。このようにしてすべての作品は建築家の手を離れて自然の手に委ねられ、完成される」(62)と述べて、自然の回復力に望みを託している。

このあたり前章で高らかに宣言した環境アクティヴィズムを期待する読者にはもの足りなさを覚えようが、ソローの心の中では全く矛盾はなかった。少なくともこの時期、あるいは『ウォールデン』出版の1854年ごろまでは自然の再生力を信じていたように思われる。この信念が崩れるに至ったのは、おそらくウィリアム・ウッドの*New England's Prospect* (1633)を読んだ1855年のことで、いかにアメリカの風景が2世紀に及ぶ植民地化の過程で様変わりをしてきたかをつくづくと思ひ知らされた時であったであろう。

その1年後の『日記』(1856年3月23日)を見れば、彼の心境が手にとるようにわかる。

気高い動物——クーガー、ピューマ、オオヤマネコ、クズリ、オオカミ、クマ、ヘラジカ、ビーバー、七面鳥などがここでは絶滅してきたことを考えると、私は自分が飼いならされた、いわば大切なものを骨抜きにされた国に住んでいるように感じざるを得ない。……私が一年と呼ぶ一連の自然現象は、嘆かわしいほど不完全で、多くのパートを欠くコンサートを聴いているようなものだ。……私が持っていたり、読んだりしていたのは、祖先が最初のページや一番すばらしい文の多くの箇所を切断した不完全な本にすぎない。

#### 4. メリマック川の変貌

##### 川と鉄道

「日曜日」という章はいわゆるソローの宗教論を扱った箇所であることで批評家の意見は一致している。ここでソローはキリスト教という宗教や教会への批判を随所で繰り返している。「教会は最も醜い建物、人間性が品位を落とし、汚されている。このような寺院はいずれ風景を歪めることになりかねない」(76)。ソローの宗教観に着目するのは正当な評価といえよう。しかし「日曜日」の章の後半部で描写されているのは、メリマック川の変貌であり、これも彼が伝えたかった重要な事実であるように思われてならない。

コンコード川を離れてメリマック川に入ると、その雄大な流れにソロー兄弟は歓喜する。ところがその喜びもつかのま、川の急激な変貌にあっけにとられ、失望へと変わる。「インディアンが漁期に出かけた場所が、アメリカのマンチェスターと称される紡績の町ローエルとなり」(83)、川はすっかり商業河川となって、木材を運搬するスクーター船が行き交って賑わっている。一方で川岸の森林伐採が進行し、土手が浸食されている。ダム(堰)の建設で洪水も起こりやすくなっているようだ。(85-86)。今やニューハンプシャー州コンコードまで運河船や小さな蒸気船が行くことが可能となっている。

しかしソローは「それは鉄道が開通する前のこと」(86)と断っている。「メリマック川の本当の船は鉄道である……魚を脅かしたミサゴの鳴き声に代わっていまや国家の進歩(progress)に目覚めさせんとする蒸気機関車の警笛が聞かれるに至った」(87)。当時アメリカは東部を中心に急速に鉄道網を発展させていた。交通手段としての鉄道の利便性は船舶をはるかにしのぐものである。川の運行は、自然のなすがままに凍結、洪水、旱魃に左右され、運河による時間的ロスも避けがたい。一方陸路に行く鉄道は、『ウォールデン』でも見られたようにその正確な運行である。「鉄道式にやるというのが近ごろの決り文句になっている」(上215)。19世紀中葉、人びとの意識を変える文明の大きな進歩の象徴が鉄道であった。

もっともどの章にも見られるように、*A Week*におけるソローの最終目的は兄の鎮魂にあったので、パストラルの構造を逸脱しないように細心の注意を払い、川の破壊を徹底的に問い詰めることはしなかった。この後ソローは詩論・詩人論・文学論を展開し、「風景に調和するのは偉大な詩」(91)、「小麦やジャガイモのために大地を耕す代わりに、作家たちは文学を耕し、文学共和国にその居場所を求めている」(97)と述べている。また自然史に関しては、「自然史に関する本は神の財産目録を扱ったものだが、神性な自然の見方を少しも教えることなく、一般的な自然の勉強方法を教えることに終始する」(97-98)と不満を述べている。この不満がやがて彼をして自然史から環境史へと、より科学的でエコロジカルな自然観へと向わせることになる。

### 砂漠化と森林伐採

メリマック川を遡って行くと川岸沿いに砂漠化が進行しているのが見て取れた。それは羊が草を食い荒らし、土地を乾燥させて砂漠化を招いた結果である。ソローはここで植樹することで砂漠化を防ぐことができると提案している(198)ことは傾聴に値しよう。また砂漠化には鉄道も加担していることを見抜いている。鉄道が地面のもろいところを通る際に土地を壊し、砂漠化を進行させるのであった。ソローは再度「火曜日」の章においても船と鉄道の比較を試みる。船乗りの生活は「のどかで充実した生活を送り……人間の幸福と清澄さに障害のない好都合な職業」(210)とさえ語る。しかしながら後半部では、「我々の航海以来土手を走る鉄道が広がり、メリマック川にはほんの少ししか船は見られない……数年後にはこの川には船は見られなくなるであろう」(213)。自然任せの船に代わって鉄道が着実にアメリカの風景に侵入しつつあった。鉄道が一般化する前のソローの舟旅は、亡き兄へのエレジーとともに川そのものへのエレジーとなっていた。

川周辺では森林伐採が進行していた。「樵が材木をころがして川に浮かべていた。私たちは太陽に輝く彼等の斧とてこを見た。丸太は埃とともに激しい音を立ててころがり、森の中で反響していた」(231)。メリマック川沿いでおこったレンガ産業とも関係がある。粘土をレンガにするためには、炉で木を燃やす必要があり、その木を求めて森林伐採が進行していたのであった。

### 1848年の旅

*A Week*には1839年の兄との旅のほかに、1848年友人エラリー・チャニングを伴ってニューハンプシャー州南部を4日間徒歩旅行した体験が挿入されていることに注意を払わなければならない。結果的に「*A Week*の調査旅行となった」(Johnson 34)この旅は、この9年間におけるメリマック川沿いの発展を否応なく垣間見ることにつながった。その痕跡はいたるところに見られたが、とりわけ特筆すべきはマンチェスターの急激な発

展の様子だった。「マンチェスターは1839年当時人口は2千人、ところが1848年には1万4千人」(245)へと急成長していた。ソローはメリマック川の変貌をインディアン  
の衰退と照らし合わせながら驚きをもって次のように描写する。「かつてこの岸辺に立  
っていた英雄たちの記念碑や神の寺院は、いまや埃と化し、土へと戻っていった。川岸に  
は年代記に記録されていない人びと (unchronicled nations) のささやきは絶え果て、さ  
らなるローエルやマンチェスターがインディアンの後を追って続々と誕生しつつある」  
(249)。1848年の旅は、皮肉にもソローに自然環境に対する新たな懸念材料を提供する  
結果となり、最終的に彼の環境意識を先鋭化させる契機ともなった。

人間の営み、総じて文明の進歩は他の種を犠牲にして進歩してきた。このような様子  
を目撃してきたソローにとって、人間の生き方そのものへ痛切な批判を繰り返している。  
例えば最終章「金曜日」では次のように述べている。

多くの香りのよい固有植物、草や薬草が家畜の放牧や豚の地面の掘り返しなどで  
多数失われつつある。このことが今蔓延している多くの病気の原因なのである。つ  
まり極度の人工的で装飾的な農耕方式に長期間さらされてきた土地が、豚小屋や温  
床にとって代わってしまったのである。そこでは利益を求める人間たちが破壊度を  
さらに推し進めているのである。(355)

自然への絶対的な信頼と人間による自然破壊の狭間の中、ソロー自身、*A Week*の執筆  
過程で何度かディレンマに陥ったに違いない。パストラルを目標に書き始めた作品に、  
忍び寄る文明の進歩や破壊性を追加せざるをえなかったのはソローにとって不幸なこと  
であったが、「真の川の旅」を描くためには兄に詫びるしかなかった。いや兄とて今の川  
の現状を弟とともに嘆いているはずである。ソローは兄のためにも真実を明らかにした  
かったのであった。

## 5. *A Week*におけるソローの自然観

### 共生の自然観

「月曜日」の章にはウィルダネス賛歌を述べた一説がある。ウィルダネスはソローの  
自然観の根幹をなす概念で、後の『ウォーキング』や『メインの森』で詳しく述べられる  
ことになるが、*A Week*でも引用されている。

ウィルダネスはすべての人にとって大切なものであると同時に近くにもあるもの  
だ。一番古い村々でさえ人間の庭園よりも周囲の境となる野生の森の恩恵を受けて  
いる。新しい町の周囲や中心部にも時々入り込む森の様相にはどこか名状しがたい

健康と美がある……松やメイブルの直立さそのものが古代からの自然の誠意や活力を主張する。私たちの生活は松が茂り、カケスが鳴くような背後の救いが必要なのである。(171)

「木曜日」の章にはソローでなければなしえないような自然への姿勢が見られる。「ある夏の日、スイカズラやコケモモの香りをかぎながら、ハエや蚊の音楽に誘われてある奥まった沼のなかに入りこみ、水面から顔だけ出すことは何と贅沢なことであろうか」(300)。視線を自然に合わすためにとったソローのこの行為は、ソローの生涯の中でも忘れがたい行為として今でもしばしば引用されている。さらにオースターは他にも彼の「奇行」について言及する——「松の木のとっぺんに腰をかけて風に揺れたり、四つん這いになっていやがるアメリカアカガエルと心を通わせようと努めたり……夜には丸裸でアサベツ川を泳いだり、コナンタムの崖に横たわり、湿った草むらのなかのコウロギの奏でる音楽にうっとりしていた」(106)。これらの行為こそ彼が願ってやまなかった自然への共生の極地である。このときのソローは自然の一員になりきっている。自然に溶け込み、風景の一部となりえた瞬間は彼にとってまさにエピファニーの境地であったかもしれない。

*A Week*の出版からちょうど100年後、ある一冊の本が刊行された。それは現代の環境倫理学の父と称されるアルド・レオポルドが書いた『野生のうたが聞こえる』(*A Sand County Almanac*)である。この書に展開される重厚な環境倫理想、特に「山の身になって考える」の思想はソローの「大地の一員となって考える」思想と重なるところが多い。レオポルドと比較するとソローの共生の自然観は荒削りで未成熟なところが多いが、時代に先行する画期的な自然観のほとぼしりが見出される。

### 超越主義的自然観と生命中心主義的自然観

「木曜日」の章には、人間は自然に見習うべきであるという超越主義的主張が列挙されている——「自然はより偉大で完全な芸術作品、人間の作った最高の芸術作品を風景の中に入れるのを歓迎する」(316)、「樹木は風景のすばらしいフェンスとなる……農民も自然の枠組みの中に入る」(318)、「自然は絶えず自己完成に努めている。世界はほどよく均衡が保たれている」(319)。同じように人間も自己完成に努めるべきであり、そうすることで風景の一部としての存在が許されるのである。このような主張は最終的に次作『ウォールデン』で生かされていくことになる。

また一方でソローは人間の可能性について、特に人間の自我こそ人間のもつ最高の資質とみなしている。「金曜日」の章には詩人論が紹介されている。彼の理想的人間像は、「真理と美を見抜く」(341)詩人、「世界の先駆的な仕事をしてきたのは美の崇拝者たち」(340)である詩人。そして詩人は自己を高らかに歌い上げる——「太陽とて人間ほど中心的ではない」(349)。この一節はいわゆる狭量な人間中心主義的世界観を語ったものではなく、

あくまでも自己が主体性をもち、自律的に自己完成を目指すソローの生き方の最高の姿なのであって、ソローはこの生き方を終生貫き通した。

このような超越主義的な生き方と、*A Week*を初めとする他の作品に見られる生命中心主義的生き方の両方を持っていたことが、現代の自然環境や文明観を再考する際に多くの示唆を与えてくれることになった。*A Week*の最後近くにおかれた一節——「正しく読み取れば、自然は単なる象徴と普通考えられている以上のものではなかろうか (Is not Nature, rightly read, that of which she is commonly taken to be the symbol merely?)」(382) は、ソローのその後の生き方を変えるターニングポイントとなったように思われる。

## 註

damに関して、19世紀半ばでは現在のような水力発電用の高度なダムはなかったので、「堰」が正しいと思われる。本稿では「ダム(堰)」としているが、一部「ダム」のままにしているところもある。

## 引用文献

- Burbick, Joan. *Thoreau's Alternative History: Changing Perspectives on Nature, Culture and Language*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1987.
- Harding, Walter. *The Days of Henry Thoreau*. New York: Dover, 1982.
- Johnson, Link C. *Thoreau's Complex Weave: The Writing of A Week on the Concord and Merrimack Rivers*. Charlottesville: UP of Virginia, 1986.
- McGregor, Robert Kuhn. *A Wider View of the Universe: Thoreau's Study of Nature*. Urbana: U of Illinois P, 1997.
- Sayre, Robert F. *Thoreau and the American Indians*. Princeton: Princeton UP, 1977.
- Thoreau, Henry David. *The Illustrated A Week on the Concord and Merrimack Rivers*. Ed. Carl F. Hovde, William L. Howarth, and Elizabeth Hall Witherell. Princeton: Princeton UP, 1983.
- . *Journal Volume 1: 1837-1844*. Ed. Elizabeth Hall Witherell, William L. Howarth, Robert Sattelmeyer and Thomas Blanding. Princeton: Princeton UP, 1981.
- . *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*. Ed. Carl F. Hovde. Princeton: Princeton UP, 1980.
- Worster, Donald. Ed. *The Ends of the Earth: Perspectives on Modern Environmental History*. Cambridge: Cambridge UP, 1988.
- . *The Wealth of Nature: Environmental History and the Ecological Imagination*. New York: Oxford UP, 1993.
- エマソン、ラルフ・ウォルドー。酒本雅之訳『エマソン論文集上』岩波文庫、1972。
- オースター、ドナルド。中山・成定・吉田訳『ネイチャーズ・エコノミー——エコロジー思想史』リプロボート、1989。
- 小澤奈美恵『アメリカ・ルネッサンスと先住民——アメリカ神話の破壊と再生』鳳書房、2005。
- 木村・島田・斎藤訳『アメリカ古典文庫—4 H. D. ソロー』研究社、1977。

クロノン、ウィリアム. 佐野・藤田訳『変貌する大地——インディアンと植民者の環境史』勁草書房、1995.

シュナイダー、リチャード. 上岡克己訳『ヘンリー・デイヴィッド・ソーロウ』ニューカレントインターナショナル、1993.

ソロー、ヘンリー・デイヴィッド. 飯田実訳『森の生活』（上下）岩波文庫、1995.